おなご先生の健康アドバイス

今年もインフルエンザの季節になりました。インフルエンザウイルスは直径80～120ナノメートル(ナノは10億分の１)の大きさで、動物の体内に侵入すると細胞に感染、増殖し、インフルエンザを引き起こします。これに対する治療薬はウイルスの感染、増殖を抑制するものです。インフルエンザにかかったかなと思ったら、すぐに受診してください。ウイルスが増殖しきった後で受診されては治療薬が役立ちません。当院でも11月からワクチンの接種を行っています(要予約)。

インフルエンザの季節です

さて、インフルエンザはいつごろから“流行病”として恐れられていたのでしょうか。日本では平安時代に記述が残っており、1890年には当時の内務省衛生局が「流行性感冒」と命名し、世間は「はやりかぜ」と呼んでいました。1918～19年には「スペイン風邪」と恐れられました。インフルエンザという呼称が定着したのは昭和に入ってからです。外国では約4700年前のエジプト、約2400年前のアテネで記述されています。

ところで、富山大学薬学部の根本英雄教授と医学部の落合宏教授のグループが、インフルエンザの増殖を抑制する新しい化合物を2004年に発見しています。現在の薬とはまったく異なる構造で、将来の抗インフルエンザ薬になる可能性を秘めています。なぜなら、ウイルスは常に突然変異で形や性質を変えていき、効果があった薬が効かなくなることが起こります。そのため、人類は常に新しい薬を作り続けていかなければなりません。

日本で1994年以降、ワクチンの集団接種を中止しています。同時に乳幼児や児童、高齢者の家族内感染から死亡する件数がぐっと増えています。集団接種による抑制効果を見落としてはいけません。

高齢者だけでなくお子様方もぜひ、予防接種をしてください。

(いんべ杉谷内科小児科医院院長・杉谷美代子＝松江市東忌部町☎0852･33･2800)